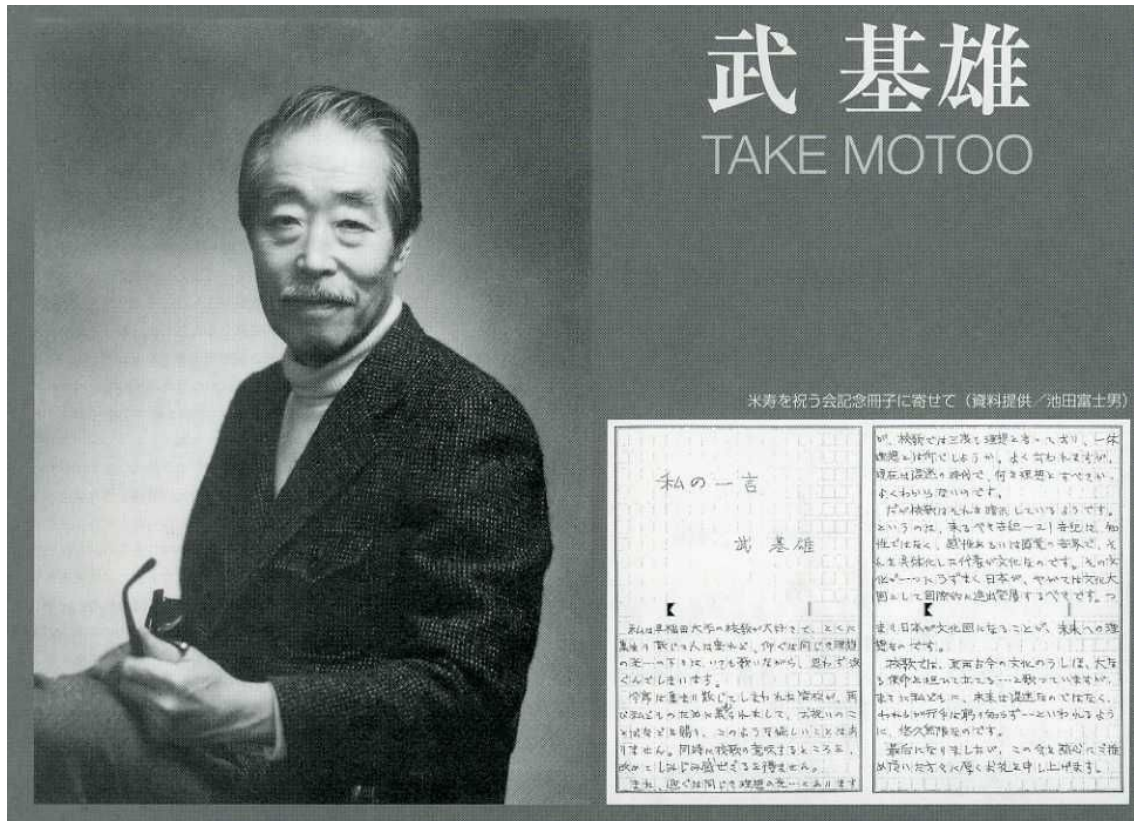


◆早稲田建築 [温故知新] 名講義ノート復刻シリーズ 07

武 基 雄 【一門下生から見た市民派建築家の素顔】

竹 内 壽 一 (株)竹内建築総合研究所 主宰／(社)日本建築家協会(JIA)理事

掲載誌: 稲門建築会機関誌 No.40 「早稲田建築2003年3月号」より



好評の「名講義ノート」シリーズ。今号では武 基雄先生の講義を採り上げさせていただくことにしました。ご存知のとおり、「市民のための建築家」を自負される武 基雄先生は、戦後のわが国の現代建築をリードしたプロフェッサーアーキテクトであり、同時に、大学院都市計画コースを吉阪隆正先生とともに創設されたアーバンデザイナーです。記憶に残る武先生の豪放磊落な講義の中では、「アメニティ」「都市の気配」「場と域」など、今なお魅力的で瑞々しい言葉が輝いています。(早稲田建築2003編集長: 後藤春彦教授)

1. はじめにーときめきの授業

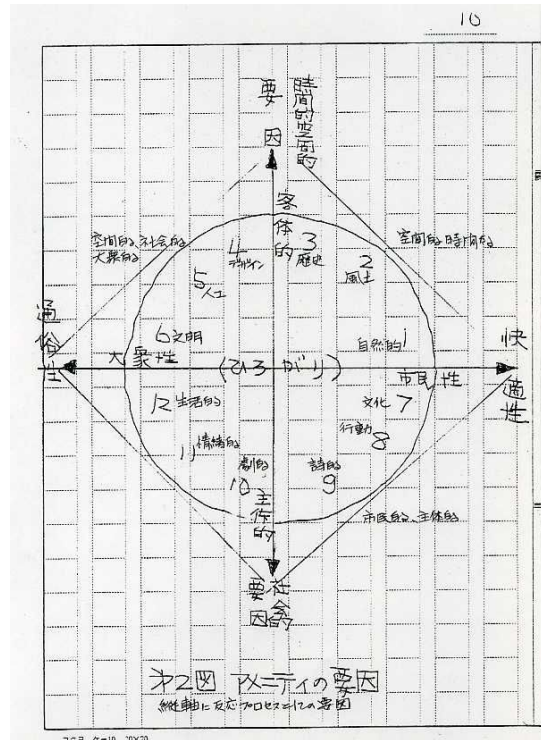
私が武基雄先生に授業を通じて初めてお目にかかったのは、1971年、学部3年前期の建築計画D「事務所建築」であったと思います。武基雄先生は吉阪隆正先生とともに当時の新訂建築学大系の編集委員で、その第3巻「劇場・映画館」を執筆されていました。また川添登著「建築家・人と作品」(井上書院)に、「気宇雄大で進取の気性に富んだ早稲田の建築学科の魅力や気風を誰よりも強く体現した建築家」として紹介されていました。

こんな先生の講義とあって、戦後のコンペで才能を開花された劇場建築の講義ではないものの、胸ときめかせながら受講したことを思い出します。十分理解せぬまま黒板の字を写したノートがあります。この中では後年のまちづくりの研究報告書や建築設計のプレゼンテーションに頻繁に登場してくるタイプの概念図が現れます。(資料1・2) 建築の設計

とまちづくりの2分野における武基雄先生の大きな足跡のほんの一端をご報告しましょう。



資料1 建築計画Dのノート(竹内寿一)



資料2 研究計画書より(武 基雄)

2. 私の早稲田建築は武基雄先生そのもの—先生と私

私ごとで恐縮ですが、この学部3年前期の定期試験の終了直後、世界の理工系の学生が海外の企業に入って研修する「IAESTE研修生」としてスウェーデンに旅立ちました。無論大学へは無届けで、12月まで約6ヶ月間休学しました。(もう時効ですので明かしますが、後輩の諸君は真似しないようお願いいたします。期間中、ニクソンショックで1ドル＝360円から240円と円高になっていました。)講義の授業の単位は、優秀な同級生の代返と代筆のお蔭で簡単に取れましたが、設計製図2課題分は要領が効きません。徹夜に徹夜を重ね、適当に製図して2課題まとめて2月ごろビハインドで提出しました。当然成績は、D(可)かF(不合格)のところ、採点者の一人、武基雄先生には「こんな困難な状況(?)の中、よく頑張ったね。」とCをいただき、留年を免れました。したがって、大学教育で最も大切な時期といわれる学部3年後期の授業は私の記憶にはありません。

また、その空白を埋めるかのように、大学院進学の時も、菊竹清訓先生も在籍された武研究室で「建築の設計と都市計画の両方がやりたい」という私に、「計画系なら設計製図は悪くてもB以上が基準だが、試験を受けて、僕の研究室へ来なさい。」と声をかけていただきました。それ以来、大学院では博士課程まで5年間、更に建築設計とまちづくり研究の助手として、飯田橋の先生のアトリエでも8年間ご指導いただきました。まさに私にとって、早稲田建築とは武基雄先生そのものです。

3. 設計のアイデアは掌の上にある—武基雄先生の建築設計

「建築は美しいだけでなく、楽しく、面白くなければならないね。」

「建築には象徴性が必要だよ。」

「この建築で何を伝えたいのか明確にしたいものだね。」

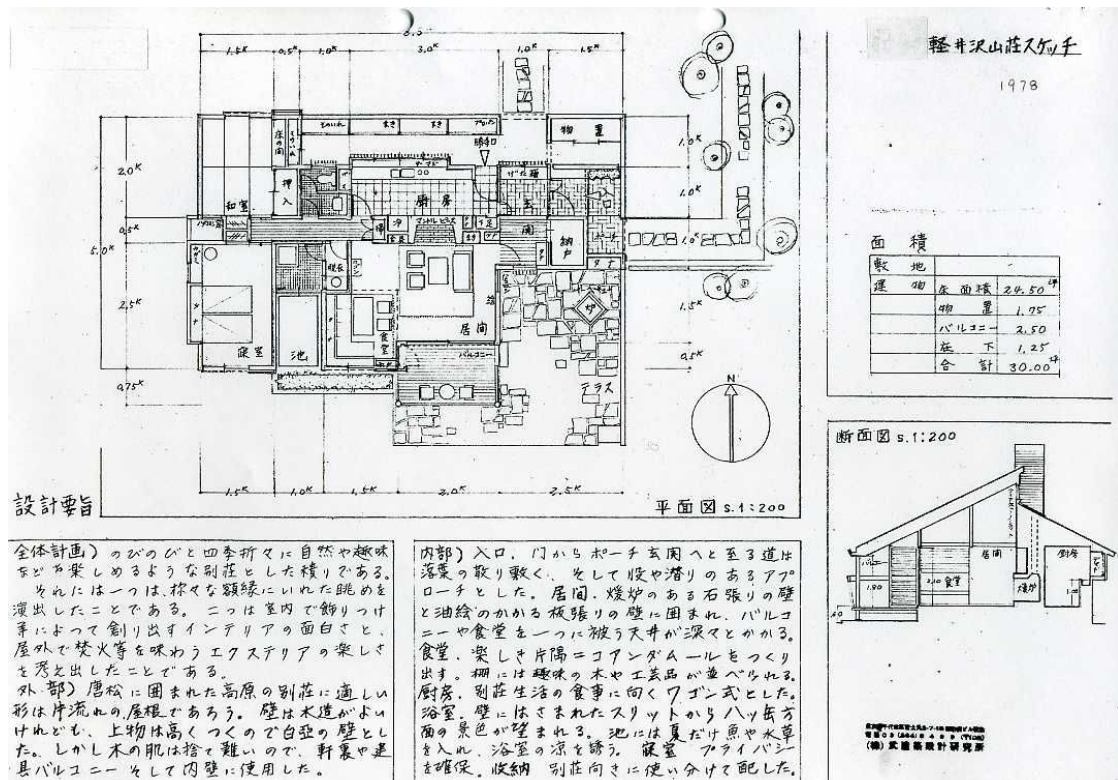
「平面と断面とは同時進行させなければいい空間にならないぞ。」

「常にデザインを考え続けていれば、アイデアがどんどん浮かび、案そのものも常に変化していくものだよ。」

「今までの脈絡とは無関係なものが突然出てきても驚くことはない。理解が深まり、力がついた証拠だよ。」

これらの言葉が、先生の口癖でした。先生は、特に基本設計や形を決める段階ではとても厳しい態度で臨んでおられました。逆に、実施設計段階では担当者に任せるといった場合も多かったように思います。鎌倉駅前の行きつけの喫茶店「イワタ」で紙ナプキンに描かれたスケッチや、横須賀線の中での「イワタ」のマッチ箱の裏に描かれた小さなスケッチが私たちに渡されます。時には平面図であり、鳥瞰図であつたりします。掌に乗る小さなサイズでのスケッチの方が全体を把握でき、また担当者も大略を了解して自らのアイデアをそこに盛り込むことも可能です。文字どおり「アイデアは掌の上にある」のです。言葉少なく「これで考えてほしい」というのが指示です。担当者としては小さなスケッチを眺めながら先生の意図をまるで謎解きのように考えねばなりません。1つの建築に2人の建築主がいるようで、時として両者が相矛盾しますが、双方に満足をいただく線を提示するのが担当者の技量であり、この上なく良い訓練になるのでしょう。その珠玉のような小さなスケッチは、残念ながら手元にはありません。

数ある建築の代表作ではありませんが、脳出血を患われる前年の1978年、軽井沢のとある山荘の基本設計段階の先生直筆の図面があります。(資料3)スタッフが忙しいので、先生自らが時間をかけて推敲された結果、「これで検討してほしい」という図面です。私たちのもつ武基雄先生の建築の共通イメージを覆すような、例えば、鎌倉商工会議所や古川市民会館、ご自邸などの「空間の原型」を追究したのとは全く別のタイプの案です。先生のごく自然に作成される案には、この他にも雁行型の流れるような柔らかい平面の住宅もあつたはずです。ここに私は先生の別の側面を垣間見ました。



資料3 軽井沢山荘のスケッチ(武 基雄)

4. 多元性・渾然一体のアメニティー武基雄先生のまちづくり研究

まちづくりの研究では、武研究室はある財団法人から数年にわたって委託研究を受けていました。私の大学院時代から先生のアトリエの時代にかけての頃です。先生独自のものとして、「場と域」、「都市景観」、「アメニティー」など大学院MCでの都市計画特論のテーマがあります。更に進んでその続編は、1979年の脳出血からの奇跡的な回復後、82年に始まりました。「愛着性と定住性」、「快適性と通俗性」などがテーマです。入院中のリハビリを兼ねたスケッチは、「左手のうた」にまとめられていますが、左手による研究計画資料も手元にあります。(資料2・4・5)

このうち「快適性と通俗性」について、先生と私とは幾度も議論を繰り返し、この研究の狙いを定めました。先生の着眼はいつも鋭く、「地域にはそれぞれの特性に応じた楽しさや憩いがあるてよい。それらは生活に有用かつ不可欠のもので、その追究の中にこれからのまちづくりのヒントがあるのではなかろうか。」即ち、様々な主張や哲学によって諸々の美意識や生活観を育む自由のなさそうな雰囲気のみは、一見整然として美しく見えても、その実、感性豊かで愛着をもたれるまちにはならないでしょう。閑静な住宅街に典型的に見られる、計画性をもつことにより確保できそうな快適性と、雑然とした歓楽街に見られる自然発生的に生ずる通俗性との対比を通じて、大きくは日本的なアメニティーとは何かを考えたと思いました。

通俗性の中には俗悪といえるものもありますが、これとても人によっては必ずしもそうではありません。人はいつも正しく明るく気持ち良いとは限らず、病的で暗く鬱陶しい時もあります。そのイライラを癒し、退屈をしのぎ、淋しさを紛らわすのが、例えば、暖簾街や飲み屋横丁などの通俗性のあるところでありましょう。このような場やいわゆる悪場所こそ、従来のまちづくりの計画で見落とされがちであった人々の自由さからくる真の意味でのアメニティーがあるのではないかと考えました。

これらを進める上での先生の言葉、……………

「まちには何でもあるという多様性や多元性が渾然一体になったものが大切で、それが同時に面白い。人々を癒すことになる。」

「数字になりにくいものの中にこそ大切なものがあると思う。」

「学位論文にしようとするあまり、数字やデータばかりを追い求めてはならない。」

「文章は誰にも分るよう平易に書きなさい。」……………などが今も耳に残っています。

これらの中に、建築を設計するのと同様の一貫した姿勢が感じ取れないでしょうか。



資料4 研究計画書より(武 基雄)

		(性 在 空) 居 住 性						
通俗性	住居性	山間地帯 山村地帯 山間地帯 山村地帯	親しい 居る 居る 居る	爽やか 別荘地 別荘地 別荘地	床 高床 高床 高床	静けさ 静けさ 静けさ 静けさ	快適性	
	生活性	山村地帯 山村地帯 山村地帯 山村地帯	親しい 居る 居る 居る	爽やか 別荘地 別荘地 別荘地	床 高床 高床 高床	静けさ 静けさ 静けさ 静けさ		
要素	社会的	社会的 社会的 社会的 社会的	社会的 社会的 社会的 社会的	社会的 社会的 社会的 社会的	社会的 社会的 社会的 社会的	社会的 社会的 社会的 社会的	社会的 社会的 社会的 社会的	通俗性
	文化的	社会的 社会的 社会的 社会的	社会的 社会的 社会的 社会的	社会的 社会的 社会的 社会的	社会的 社会的 社会的 社会的	社会的 社会的 社会的 社会的	社会的 社会的 社会的 社会的	
		(性 動 程) 話 生						

資料5 左手の研究計画書より(武 基雄)

5. 気骨と良識の「市民としての建築家」－武基雄先生のスタンス

武基雄先生はまちづくりの研究の一方、鎌倉市都市計画審議会という公の場でも、鎌倉都市計画市民懇談会というNPOのような場でも、常に市民の生活の中でアメニティの本質 (the right thing in the right place) を考え、実践されました。即ち、「建築の美」を超えた「都市の美」や市民の「生活の美」を求められていたと思います。居住地の鎌倉の特性もあって、「都市をつくる」ことと同時に「自然的、歴史的環境を保全する」という今ならごく当然の考えを社会に歩数先駆けて示し、一貫した姿勢を保ち続けられたのです。

2001年6月ごろ、私は偶然にも石原慎太郎東京都知事の恒例の記者会見をテレビで見ました。「都市再生が大流行りだが、地域にはその地域を良くするために良識のある建築家が必要だ。鎌倉を見たまえ。もと早稲田の先生らしいが、環境を守る気骨と良識をもつ建築家がいるから鎌倉のまちは良くなるのだ。東京もそうならなきゃだめだよ。……」との趣旨でした。至言です。市民派建築家・武基雄先生の面目躍如たるものがあります。

このように、情熱的に鎌倉のまちづくりに関わってこられた粘り強さとその成果が行政のトップにも認知され評価されていることを確信してやみません。現在でも長年にわたって培われた「市民としての建築家」精神が、アドバイザーをつい最近まで務められた鎌倉の市民ボランティアによるまちづくり組織で生き続けています。もちろん、その精神が専門家としての私たち門下生に引き継がれていることは言うまでもありません。なお武基雄先生は、大病後の後遺症を抱えながらも2002年12月現在、92歳でご健在です。※ (※筆者の執筆当時の武基雄先生の年齢、2005年10月8日逝去、享年95歳)

その2. ノートの解説から見える慧眼

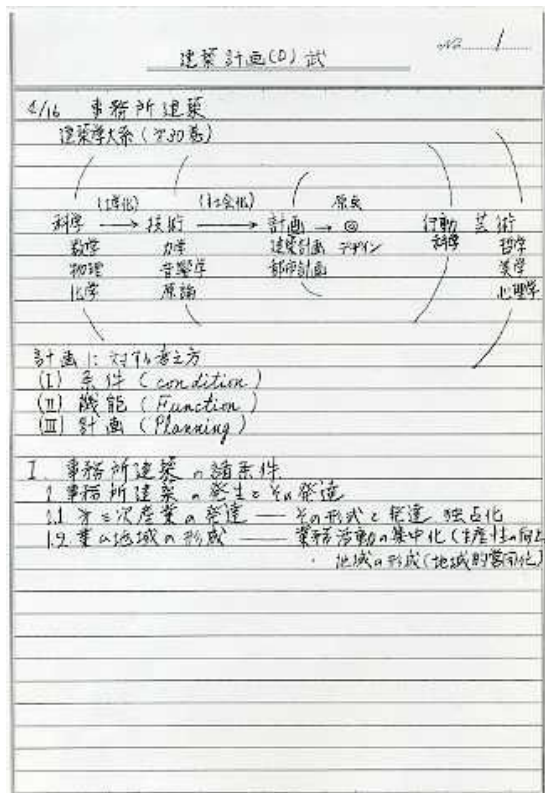
武基雄先生の「素顔」について入稿後、編集者から「授業のノートについてもさらに詳細に紹介・解説してほしい」との要請がありました。公開することは大変気恥ずかしいことですが、続編として私の手元にある授業のノートから、幾つか取りあげてみます。

6. 原点はデザイナー－武基雄先生の計画概論

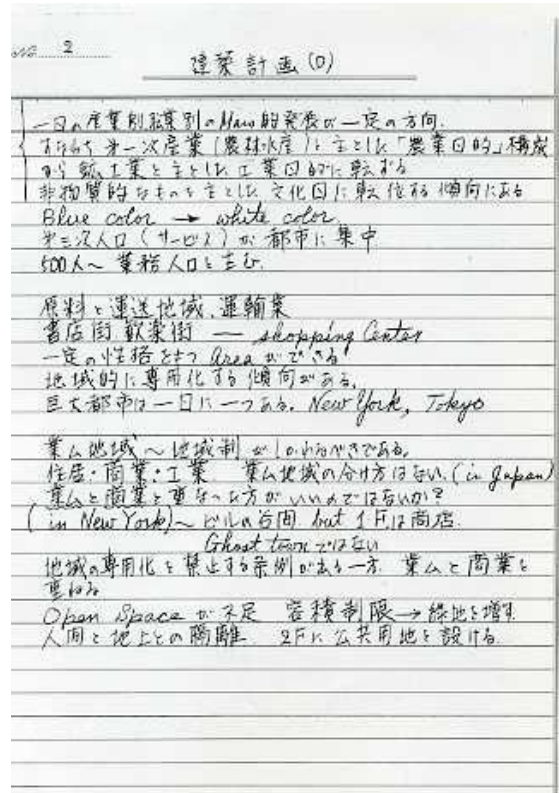
劇場建築や都市計画の専門家としての武基雄先生と建築計画D「事務所建築」とは一見、馴染みがなさそうに思われるかもしれませんが、多くの先生方がそうであるように、初回の講義には特に講師の基本的な思想が色濃く表れ、講義内容も研究テーマの方向に言及されていくものです。この授業の初回は「武基雄先生の計画概論」というべきでしょう。

黒板に書かれた図を解説してみましょう。人間には左脳で考える論理的な思考と、右脳で感じる感性とがあると言われていています。図の左側からは基本的なサイエンス、それを応用し工業化するのがテクノロジー、更にそれを社会化するのがプランニング (計画学) との意味で、左から次第に中心に近づいていきます。一方、右側からは哲学・美学などの芸術を支える人文科学、それらを机上に留めることなく学として実行に移すのが行動科学でしょう。左右双方から徐々にアプローチして最終的に求められるものは、「デザイン」という「究極点」であり、「原点」です。(資料6)

しかし、作者の主観が多分に反映されやすいデザインそのものは、如何に客観性をもつもののみを積み重ねたとしても、主観は排除しきれないために、「学」にはなりにくいものです。普遍化できる「学」としてはデザインに近付きつつも、その周囲までアプローチするに留まっている。最終的にデザインを決定づけるのは、周囲の多くの学問に裏付けられたその建築家の「良識」である。そんな、建築家を志す学生に初めて向けられた大切に大きなメッセージだと解釈できます。



資料6 建築計画Dのノート(竹内壽一)
= 究極点・原点としてのデザイン



資料7 建築計画Dのノート(竹内壽一)
= 業務地域と商業地域とを重ねる

7. デザインを構成する3つの要素

また、「デザインに対する考え方」として、1) 条件(Condition)、2) 機能(Function)、3) 計画 (Planning) の3つが挙げられています。私の必死にとったノートには「計画に対する考え方」とありますが、後年、先生に長年にわたりご薫陶を受けた立場から推しますと、おそらく私の書き間違いで、「デザイン」が正しいと思います。デザインという言葉は、日常、先生の多用される単語の一つです。(資料6) 個々の建築をとりまく固有の条件を読み取り、その建築に要請される機能をうまく組み立てていくことが最終的なデザインになる、と理解できます。現代風にはデザインを規定し構成する3要素として、1) 文脈 (Context)、2) 計画(Program)、3) 心象 (Imagery) という分け方もあろうかと思ひます。

8. 業務と商業とを重ねる—都市計画的視点

次のページには、事務所建築が成立するための社会的条件や地域制に言及されています。ここには、早稲田の建築学科に都市計画コースが創設されて間もない頃の研究テーマや後年のまちづくり研究に関連ある記述も見受けられます。当時の武研究室の卒業論文や修士論文のテーマを見ますと、業務・商業地、住宅地、産業、余暇地域などの地域制に関するものも目に付きます。(「建築家・武基雄と早稲田大学武研究室の記録」[2000年 6月30日発行] をご参照ください)

ノートにはありませんが、「都市の最も良い場所にはたいい銀行が立地している。午後3時にシャッターを降ろすので、折角の都市の中心が寂しくなる。」ともおっしゃっていたことを鮮明に記憶しています。このノートの記述には注目すべき先生の主張があります。推定するに、黒板に書かれたものではなく私の聞き書きだろうと思いますが、主張は次の2点に要約できるのではないかと考えます。(資料7)

①業務地域には単独に地域制が布かれるべきである。

……現在の日本の用途地域には住居、商業、工業の地域の区分はあるが、業務地域という区分けはない。(今もありません)

②業務地域と商業地域とは重なった方がいいのではないか。

……ニューヨークには多くの超高層建築が林立している。人々が地上にいと、まさにビルの谷間を歩くことになる。しかし、用途地域制によって完全には用途純化されず、地上1階には商店が入っている。そのために、業務時間が過ぎても人々の往来で都市が潤い、ゴースタウンにならない。地域の専用化(用途純化)を禁止する条例とともに、業務と商業とを重ねるべきである。

9. 都市に求められる多元性—その慧眼

実は、この部分にはかねてからの先生の主張があり、研究テーマ・「都市に求められる多元性=渾然一体のアメニティ」に関連があると私は考えます。用途純化よりも多少の用途混在の方が都市を活性化させるはずなのです。

用途純化にはいい点もあれば悪い点もあります。ブラジリアや筑波はどちらかといえば用途純化に傾いた計画都市でしょう。都市は多くの人々が長い時間をかけて徐々に創り上げていくものではありません。しかし機能的には如何に素晴らしくても、生活の潤いや都市への愛着性の点では必ずしも成功しているとはいえません。

また先生とは無関係ながら「アメリカ大都市の死と生」(J. ジェコブス著)という大変面白い本がありました。この中で著者は、「混用地域の必要性」や「老若男女の混住によるStreet Watcherの重要性」に言及していたと思います。地上に留まる人々の存在が、その眼が、都市を監視し見守ることで犯罪からの安全を確保するとともに親しみや愛着を生む、というものだったと思います。

更に2002年9月初旬、丸の内ビルが超高層建築として新築オープンしました。業務に特化した地域の建築の低層部に、商業の機能を取り入れたのです。休日は閑散としていた丸の内も、目新しさも手伝ってか、不況といえども人々で溢れかえるようになりました。

これらの事例は、「業務と商業とを重ねる」という武基雄先生の「多元性=渾然一体のアメニティ」の主張を裏付けるものであって、時代の数歩先を読んだ慧眼でありましょう。



1980年、学生時代からの畏友・丹下健三先生と武基雄先生



1964年、京都国際会議場コンペの模型を前に学生と(写真提供/池田富士男)

武 基雄 略歴

- 1910年 長崎市磨屋町生まれ
- 1937年 早稲田大学理工学部建築学科卒業、大学時代より生涯に亘り丹下健三氏と親交、石本喜久治建築事務所勤務、詩人・立原道造、西山卯三氏らと親交
- 1943年 早稲田大学理工学部大学院修了
- 1950年 早稲田大学助教授、仙台市公会堂(※1)
- 1953年 大学内に武基雄研究室を置く
- 1955年 早稲田大学教授、鎌倉市都市計画審議会委員
- 1959年 長崎水族館(※2)
- 1962年 長崎市公会堂(DOCOMOMO100)
- 1966年 大学院都市計画研究室創設、古川市民会館(※3)、早稲田大学第二学生会館
- 1969年 鎌倉商工会議所、鎌倉浄明寺の家
- 1972年 島原文化会館
- 1974年 鎌倉市都市計画市民懇談会委員、三角の箱(自邸)
- 1979年 吉井町産業文化会館、「左手のうた」、「都市はふるさとか(共訳)」
- 1981年 早稲田大学名誉教授、「市民としての建築家」、(財)第一住宅建設協会委託研究
- 1986年 島原市図書館
- 2005年 逝去

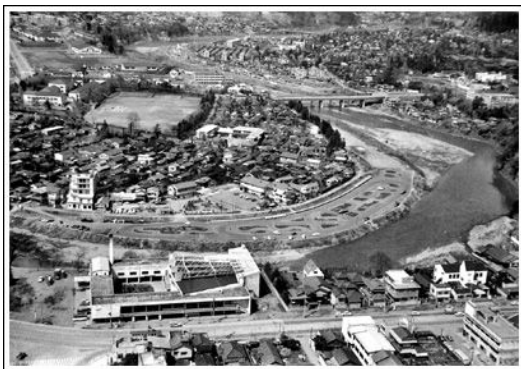
参考(1) 石原慎太郎エッセイ「日本よ」 <http://www.sensenfukoku.net/mailmagazine/no20.html>



愛宕山山頂から見た江戸の風景 (慶応元年[1865年]英国の写真家F. ベアト)

参考(2) JIAの建築家達

<http://www.jia.or.jp/topics/kenchikuka/dat/take.htm>



※1 仙台市公会堂 1950年 「広瀬川の記憶」より



※2 長崎水族館 1959年



※3 古川市民会館 1966年 (DOCOMOMO100)

